

[エッセイ No. 20 歌との出会い]

もう何回となく問われたことだが、私の歌との出会いは、振り返ると母の「子守歌」だったと思う。いったい何歳の時の記憶だろうか。

一人っ子だったし、スマートフォンなども存在しなかった時代、母は、自分の知っているありとあらゆる曲を、毎晩、私が眠りにつくまで歌ってくれたのだった。

音楽家ではなかった母のレパートリーは、時代もジャンルも見事に多岐にわたっていたが、意味など分からなかったはずの歌詞とともに、不思議と心に残った。

いつの間にか自分でも歌ってみたいと思うようになっていたのだろう。3歳になるかならない頃、母の手に繋がれて、逗子の桜山の道を、当時の歌の先生の所へ行った思い出が微かに蘇る。ちっちゃな子どもは、まだほかにすることもない。先生の教えてくださる歌を、次々と覚えて歌い、それがまた、先生にとっては面白かったらしい。今ではきっともう誰も知らないであろう「山田のかかし」から始まった、歌の先生のところでの楽しい日々。発表会では、まだ「アガル」という言葉も知らず、口を大きく開けて精一杯に声を響かせた。

亡くなる少し前まで、欠かさず私のコンサートに来てくださったその先生は、音楽学校出身の「声楽家」だった。それどころか、「毎日コンクール」(現在の「日本音楽コンクール」)の受賞者でもあった。そして、私に「歌う楽しさ」を教えてくださった最初の方だった。

それから私の歌の世界は、ちょっと変わった方向に移る。引っ越しとともに逗子の先生からは離れざるを得なかったが、ある時、叔父が勝手に応募した「オーディション」(ということも後で知ったのだが)で、「ビクター児童合唱団」に所属することになった。そのころ巷で有名だったのが、ウィーン少年合唱団や木の十字架合唱団。母がイメージしたのは、そんな合唱団だったらしい。しかし、実はかなり違っていた。

日本には、「童謡歌手」というジャンルのある時代があった。可愛らしい少女たちが、クルクルとパーマをかけた独特の髪形をして、バレエのチュチュみたいな衣装を着て、様々なステージで童謡を歌った。今に直せば、「アイドル」の走りのような存在だったと言えよう。小嶋くるみさんは、そんな時代のスターだったし、ほかのレコード会社には、安田姉妹がいた。お姉さんの方は声楽家になり、私の音大の先輩になったが、妹さんの方はその後、由紀さおりさんとしてずっと歌い続けていられる。その頃は「アイドル」なんていう言葉はなかったし、子どもの私の目には、「歌の大好きな人たちの集まり」であり、歌の仲間だった。基本はレコード会社の教育課で、どんどんと新しい童謡が作られ、私たちは毎週次々それらを録音して、学校での“音楽普及活動”のようなことをしていた。その傍ら、「芸能界の仕事」のようなこと

も数多くあった。

オペラを歌うようになったころ、「小さいころ、アイドルになりたいとは思わなかったのですか？」などという問いもしばしば受けたが、私はなぜか興味の一滴も持たなかった。おそらく理解もしていなかったと思う。私は髪型もお化粧も、他の「団員」とは違って全く普段のままだった。

歌うことが好きで、それを好きな仲間とともに一緒に歌って、ただそれだけ。時々ソロで歌うこともあったが、目立つことが好きではなかったのも、ステージ上ではなるべく後ろの方に隠れて、誰か知った人に見つからないようにしていた。「ちえのわクラブ」というタイトルのラジオ番組で、全国の小学校も回ったが、“仕事”ではなく、歌うことが楽しかっただけだった。その頃の仲間には、その後、音楽学校に行った人たちが結構多い。

この「ビクター児童合唱団」での何年かで得た、音楽上の影響はものすごく大きいのだが、それ以上に、ここで歌を教えていらした芸大出身の先生との出会いが、私のそれ以降の道を決定づけた。その先生のところに、今度は声楽を習いに通うことになったのだ。何よりも「クラシックの歌を歌う気持ちよさと楽しさ」を重視した指導は、私に合っていたのかもしれない。14歳になろうとしていた。

この続きの専門的な話はまた違う章で書くことにして、ここでは前述した「アイドル」と「芸能界」という、私にとってとても“不思議”な日本語について、ちょっと触れてみたい。

「アイドル」とは何なのだろうか。誰が生み出した言葉？ 外国の人に聞かれて、説明することがこれほど難しい職業はないかもしれない。そもそも「アイドル」とは職業なのだろうか。

もちろん私の中でイメージはある。でも、具体的に「何をする人」か、なんの世界か、なかなか正確に言葉にできない。「アイドル」を、言葉としてそのまま外国語に訳しても、その具体的な内容を説明するのは(私には)不可能だ。皆の「アイドル」となり得る人たち？ いったい何をする人？ 誰か教えてほしい。

そして「芸能人」。本来は「芸能ごとに従事する人」、英語で簡単に一言で言えば、エンターテイナー、芸能界はエンターテインメントの世界、なのだろうが、この英単語自体は、音楽家も歌舞伎役者も俳優も芸人もすべて含む。しかし日本の感覚だと、例えば歌舞伎の世界の人でも、芸能界に足を踏み入れている人とそうでない人がいるらしいし、人に知られるポップスの音楽家は芸能界の人間でも、クラシックの音楽家は(ほとんどの場合)違うらしい。ではテレビに出ていけば「芸能人」？ 舞台だけでは違う？ 例えばミュージカル俳優は？ いわゆる新劇の役者は？ 名前が人に知られているか知られていないか？ 単に、テレビやラジオを活躍の場に

ている人？ わからない。「芸能界」にはデビューも「引退宣言」もあるらしい。いったいどんな風に「線引き」がされるのだろうか？ されているのだろうか。

そうだ、「エンターテイナー」という言葉には楽しい思い出がある。日光の華厳の滝を訪れた時のことだ。観光客も少なく、空いていた。

5, 6人のフィリピンの人たちと一緒にエレベーターに乗ることになった。とても楽しそうで陽気な彼ら、(元)夫に「何の仕事をしているの？」と気軽に尋ねてきた。「ピアニストだよ」と答えると、彼らは大騒ぎ。一人が「オー、僕もピアニストだよ！」、そして「どこから来たの？」に、「オーストリア、ウィーン」と言うと、彼らの興奮はマックス状態になった。「ウィーン、ウィーン！ 音楽家の街！」

私たちは内心、このごく普通のフィリピンの人たちにまで知られているウィーンで、やっぱりすごい街ね、フムフム。

「ウィーンでさあ、ものすごく有名なピアニストがいるよね」

フムフム、そうそう！ いるよ、いるよ、たくさんいるよ、誰のことだろう、と知っている何人かの有名なピアニストの名前を次々と挙げたが、違う。

「すごお有名なんだよ、知らないの？！ 彼の映画もある。」

フムフム?? 映画？ そんなに有名なピアニスト？ 何回かのやり取りの末、やっとクリアになった名前は、「アマデウス」！ 私たちはさすがにズッコケタが、映画の影響とはすごいものだと感嘆もした。ちょうどモーツァルトとサリエリの映画が世界中で流行った時だった。でも、あのアマデウスは、ずうっと昔に死んでしまったのだよと告げると、とても残念そうだった。

彼らは宇都宮のフィリピンパブでショーをやっているグループで、一人はピアノ担当。「仲間、仲間！」とウィーンのエンターテイナーとフィリピンのエンターテイナーは、一緒に楽しそうだった。日本入国の際の労働ヴィザ上の区分けは、双方とも全く同じ「エンターテイナー」なのである。